大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日發行
大正十四年十月八日印刷納本　大正十四年十月十五日發行

46

光

第四十六輯

大正十四年十月

◆自利利他……西田天香
◆禪管見……中桐確太郎
◆南紀行脚……ＩＴ生
◆自分に聞かせる言葉……八田勝三
◆私の信仰……齋京守道
◆如是生活……乞士天涯

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◆高尾山の歌（三）……磯山松男
◆園を離れ行く人々……Ｓ生投
◆鹿ケ谷だより……無庵
◆源信僧都四十一箇條起請……拾芥抄
◆未明の先驅者（一）……水上鐵次郎
◆クリスト教社會主義史（七）……松下吉衞

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戯三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の辨じ得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

自利利他

西田天香

今日は一週間の盆の集りの中日にあたるので、因縁のある一燈園の佛様達に盆供養をさせて貰ひます。毎年、別に日はきまつてゐるのではありませんが、今年はいつもより少しおくれて今日になりました。

一燈園では一度も法事らしい法事を營んだ事がありません。私もまだかつて、兩親の法事を、今日は法事だといつて行ふた事がありません。よい事かわるい事か、一燈園では自然そういふ風になります。その代り毎日御經を讀んで、有緣の人々に回向をします。維摩經の『智度は菩薩の母なり』から『痴冥無智の者を除く。』まで讀んで、それがどんな日に回向になるのか。本當はお經が第一の回向ではない。各宗の管長を聘んで法事した處で、果して回向になるかどうか、考へつめると、一燈園では最後はやはり托鉢で落付くことになります。

お光による托鉢、燃燈佛以來の諸佛、一行の托鉢の功德、それを以て回向すれば、それに越した事はない。それはあまりに誇大妄想だなどいふ人もあるが、それより仕方がない。追善のためとて法事するのは、そのぎり／＼にゆく間の枝葉に過ぎない。管長さんなぞの法事には、その經文の骨髓をい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

はれる。一燈園は托鉢が骨髓でありますほんのちよつとした頼まれ仕事、お掃除をとか、御飯たきをとか、そんな事をしてそれが、それほど大きな事業になるかと。しかし、それは形だけのなら何にもならぬ。相應した立派な光が宿らねばならぬ。精神と行爲と一つに精進する事ですが、そこに無理があつてはならぬ。それを靜かにとゝのへ調へて托鉢するやうに。

六種震動といふことがある。あらゆる物が振ひ動く。私はそれを信じ得る確信がある。そこへ游ぎつかうとすること、それが第一の法事になると思ひます。私は毎日法事をしてゐる氣持です。私はことさらに、僧を呼び御馳走をして法事をするやうな事なら、みなさんにもそうせねばならぬ。そんな事は煩はしい事で、又何の事にもならない。せねばならぬといふ習慣でするのではない。その中には一番よいものが含まれてゐるのです。皆さんと一緒に、別に法事らしうしないが、先祖代々各々――と讀經の後で回向をする。その位で、そこから親の命日でも、どんな佛の日でも、そのまゝ托鉢に行つて貰ふのは、これで立派な法事をつとめたと同じわけだといふ確かな信念が動かぬのです。禪宗では盆自恣日とて、今日は地獄の釜まであくといひます。それにならふて一燈園も、今日はさゝやかな佛の供養をさせて貰ひます。それに因んで今日のお話は、自利利他といふ事について申します。

利他利他といひたい程の一燈園が自利利他と申すのは可笑いやうですが、それは自利の解釋が違ふのです。自とは私自分といふ事ではないのです。あの人は人樣の事をするのが好きな人であるといふ時、その自は自分の事でない。子供の母は子供の事を思ふ、自分の事を忘れて、一心である。母にすると、子供が卽ち自である。無地無我であつて、自分ではないのです。といふて、無理にも、儲けて

置くのは國家の爲めなどいふのとは又違ふ。高めていふと、自分の中のお光の心、大我の自であります。言葉といふものが不完全である爲め、誤られて行きますが、他力敎が自力敎を批難します。自力の方ではまた唯我獨尊といふてゐる。眞宗の他力からいふ自力は、小我の自力を批難するので、自力敎ではその自力は大我のそれを云ふのであります。見方が違ふので、他力のいふ骨髓と、自力のいふ骨髓と同じものであります。そこであります。自とも他とも云はぬ。赤兒は生れて育つ。そこに不二がある。他力とか自力とか、自利とか他利とか、云はいでもよいのである。お光のまに〳〵入つて了ふ。雨が降るとか天氣だとか、世間的に考へたがつて、二つになるのです。もし光にゆるされた自を徹底するなら、その時は周圍も大なる利益を受ける。龍安寺の和尙の云はれた『路頭つくるところ再び經過し』云々、その心持でゆく時、明治先帝の仰せられた、高遠と深厚の德の意がはつきりして、其時我國は萬々歲であると申された、これは即ち自利利他である。自利も利他も一つのものである。

昨日南禪寺へ、大井さんの法要にお參りしました。その時、坊さん達が、口で楞嚴經を唱へながら立つて廻る。目は半開合掌して整然として廻る。それは善い姿勢で運動してゐるのであつた。妄念を去り、深呼吸をするのが、養生法の第一であるが、法要はちようどそれをしてゐるのである。一番自分によい事をした、それが佛の爲めになり、人がまたそれを歡んでお參りに行く、大勢の人が靜かにそれを拜んである。自分に一番よき事は人へもよき事になる。自利も利他も同じ形である。法要に於ける老師、ザンを敷いて、楞嚴禮拜を三度して最後にピッたり頭をつけ、手を少し上げ頭をその下にするのは、下座の極を表はしたので、一切を拜むかたちである。敬虔の念の極致は、自分を開放する

事にある。現今の思想では自我を增大せんとするのです。法要のお經がすむと、在家の日常生活の問題のお話になる。法要中の大事は、老師の下座禮拜で、自分を忘れて無くなつた時である。拜んで無想になる時、すべての願は滿足成就するのである。あとのお說教は、それは水を交ぜたほんの薄いものである。自分のよい氣持の時は、一切によきものとなるのです。その緊張の時、これが自分にも一番よい時で、無論人にも一番ひどく時です。芝居なぞにも時々に山、最緊張の場面を演じます。忠臣藏では全編中鹽谷判官高定が、切腹する處が一番緊張して、見物も引きつけられる。鹽谷が切腹の時、息の切れぬうち、一度この氣持を語りたい、それで大石を待つ。大石は國に居て飛脚を受ける、急いで馳せつけると、判官は刃を紙で卷き腹へ突きさし引廻す。まだ藏之助は來ぬか、藏之助はまだかと、皆がハラ〳〵してゐる。大星力彌がまだ參りませぬといふ。折から大石は花道より馳せつける。殿樣に逢ふ其時はもう互にものは言へぬ。判官の目で言えぬ口で言へぬ其心が藏之助に通じた時、藏之助は靜かに胸をたゝく、よろしい、あなたのお賴みは引受けたといふしぐさである。そこが全編の山をなす、そこから忠臣藏といふ題が生れ、芝居が仕組まれるのである。藏之助の胸をたゝく一刹那が、全編の骨髓で、全編の活躍がそこに根ざすのである。老師が諸佛摩訶薩に心を捧げて拜む同じ骨髓である。形だけなら何にもならぬ。六種が振動する、それを摑んでゐるでなければならぬ。大石が胸をたゝく。その骨髓を以て、一燈園の托鉢をするのでなくてはならぬ。グン〳〵禱を深めるとそこに到達する。そして、あらゆる整理の方法を呑み込んで、何事もよろしい、引受けるといふ底の覺悟があれば、自利利他、圓滿具足する、自利利他に不二の光が輝く。

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

龍安寺で光嚴天皇様のお話しがありました。天皇がある時行脚して高野へ參られた、細い道を行きかゝると、二人の品の惡い侍が來かゝる。天皇さまは御自身路をよけられて、二人をお通しなされた、道の片隅にうづくまられた時、天皇様に刀の尖が引きかゝつた。故意にしたので、天皇様は谷へ落ちたまふた。お附の方々は、如何に御修業の御身とはいへ、あまりに無禮と怒り、追はんとせられしを、天皇は靜かに止められ、金剛經の聖句を引いて諒々と訓へられました。後、高野山にて二人の侍は、それを知つて、恐入りお弟子にと願ひ出たといふ話。供の人の怒るところを制へて金剛經を敎へられたところが山である。代々の天皇が、かうした御一代に山があらせらるればこそ皇統は連綿である。

宇宙にはどうしても犯すことの出來ぬ一つの理法がある。ちよつと頭を下げることが三千大千世界に波動する。永遠につながるのである。其場合だけのもの、自利利他その意味のないもの、そんな行なら何の甲斐もない。龜山天皇様は、國難に際して、命を捧げて祈られた、皇統連綿の德を深くうづめられた、それは最も緊張せられた事であつた。私のやうな貧弱な者でも此生活を惠まれるには愛染堂で籠り、また妻や子供にあやまつて謝つて、此一關を通さうとしたのでした。愛染堂に坐つた時、生存競爭で奪合ひの生活をせねばならぬのなら、此まゝ死んでよい、さう祈つた。眼を開いた時、赤兒の泣聲がした、赤兒は乳をさがしてゐる、母は飮んで貰はねば身體によろしくない、こゝには無理がない、きはめて自然である。生存競爭しないで生活出來得るといふヒントは與へられた。求むる事なき時、淨められたもので展開して來る。こゝまでには切つて切つて、最後の一筋を殘してはならぬ。そこまでせいでもとか、やり過ぎだとか云はれますが、そんな事では衆の濟度はむつかしい。切

るものは一つも切らず、權利のあるやうに思ふてゐる。ほんとは許された權利ならよろしいが、ほんとの權利は手前の思ふ樣なものではない。切り過ぎるとは我慢で切り過ぎる事をいふので、大我で切つてしまはねばならぬのです。

赤肉團上一無位の眞人、赤肉は體、無位の眞人、自我が無くなつた後に出るもの、遍路をすると、初めは婦人なら三里位でつかれてしまふ、しまひには十里も歩ける、それは無我で歩いてくるのです。初めは胸で歩く、それでせつなくなる、それからは腰で歩く、だん〳〵なれて身體が調ふと、自然に下腹に力が出來て、身體は輕くなる、役の行者は無我で歩くから、どんな處でも早くかるく歩けるのです。子供は大人も及ばぬ大聲を出す、執着せぬ無垢のものが、子供には常に出てゐる。禪で引導を渡す時、カーと一喝するのは、無我な開放し盡したものである。南禪寺の老師南針軒は、カーといふ時、聲も聞えぬが、實に立派なカーであつた。妄念を切つてしまふ無我で、一無位の眞人が叫ぶのである。妄念を切らず、執着しての喝は喝といふ字を讀んでゐるので、ほんとうのカーは出ない、無位の眞人から出ぬものは妄念である。ある人、東福寺の老師に獨參して、無字の公案を貰ふた。趙州が狗子に佛性ありや無しやと問はれて、無と答へた。皆この無字に執はれる。有の反對だとか、何も無いのだとか、半句も通らぬ。此人は三度所解を呈しに行つた。そして無——といふ。これでよろしいか、自分でよいと思ふたらそれてよいではないかと云はれる。暫くすると又獨參する。無——これでよろしいか、自分でよいと思ふたら、それでよいではないか、半年も經つて又行く。同じ事をくり返す。しまひに自ら迷ふて、一體どれが本當ですかと聞いた、是みな迷妄である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

こゝで私が——天香が、いろ〳〵云ふてゐるのでない、三千大千世界と私と話してゐるのである。私を天香とおもふ人に話したくない。自分と三千大千世界との間に、此問題はどうしたらよろしいかと聞く人に私はその取次をする。私に皆までお任せ出來ぬといふ人に私はいひたくない。法然上人は關白兼實公の館からを戻られる時、宙を一尺高く歩むと公には見えたといふ話である。これはうそでない。お光の人格は、どんなものが表はれるか知れぬ。一無位の眞人が、めい〳〵にあつて、それがはたらき出す時、めい〳〵の中にも、自利利他の山がなければならぬ。私の愛染堂で、生存競爭によらねば喰べられぬなら喰べまい、死んでもよいと覺悟した時が、最後の一無位であつた。一燈園にちよつと來た人が、一燈園へ行つて來たが、たゞはたらいただけであつたと。それでは何にもならぬ。家に歸りても一尺高く歩くのでなければ。

ある同人の御母さんが、私に、あれは私の子だと思ふたのは勿體ない事でした。あれは佛樣の子でしたと言はれました。無位の眞人まで行くと、自利利他は具足する。藏之助は胸をたゝいた。始終たゝき通しではない。祇園の茶屋で藝者舞妓とたはむれ、手ぬぐいで目かくしをして、さはいでゐるところもある、胸をたゝいた一無位の眞人を持つたまゝ、一力で遊んでゐる。その意を見る人がない。皆形を見てゐる。遊んでゐる藏之助は、實は何をしてゐたのか、碁を打つてゐる時、早飛脚が來た。そうかと言つたきり碁より離れぬ。打終えた時は、もうそれの畫策が、ちやんと出來てゐた。胸をたゝいた時も、藝者と遊んでゐる時も、碁に夢中の時も、同じ緊張さを持つてゐる。形はどうあらうと、それを批評する言葉はない。人を見ず、己れ胸をたゝく、其底を忘れぬやう、それが一切への供養である。托鉢は此意味をそなへて、近くは親の爲め、一切衆生のため、まことに、おろそかであつてはならぬ。これで盆供養のお話を終る。

（大正一四、八、一八日朝、一燈園に於ける講話筆記）

禪管見

中桐確太郎

一

禪につきては、私は全く門外漢であります。尤も明治廿六年、學校を出ました前後、鎌倉圓覺寺で熱心に修業してをりましたる同窓の友人に勸められて、宗演老師に御目にかゝつたこともありましたが、御話を承はつてをる中、老師に對しては誠に失禮な考へがムラ〳〵と起りまして、どうしても御弟子になるといふ氣になれませんでした。辭去の後、自分のナマイキを懺悔して、暫く經ちて再び相見いたしましたが、やはり同樣の結果にをはり、弟子入りのことは遂に思ひ斷つたのであります。かやうな譯て、室内の光景も何も存知せず、全くの無識漢でありますが、讀みかじりや、聞きかじりで、禪といふものに對しては、一種の憧憬を有してをりますることは今とてもかはりはございません。

蓋し私に取りましては、佛敎が基督敎及び其他の偉大なる宗敎に接しますまでは、佛敎即ち宗敎であり、基督敎もまた同じ樣にして、基督敎即ち宗敎であたつやうに思はれます。即ち同じく佛敎と呼ばるゝものゝ中にも、著しくその趣きを相異にしてをるものがあると同時に、基督敎の一派と稱せられてをるものゝ中にも、その質、佛敎と名づけらるゝものと相通ずるものがあるやうであります。同一なりしものが、その經歷と環境とによりて種々に變遷することを思へば、種々に相異なれるものを同

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一の名に攝することの必ずしも無理ならぬことを察することが出來ます。同名にして異質なるにも、異名にして同質なるにも、それ〴〵の理由があり、從つて大觀すれば、あらゆる宗教は畢竟するに、同一の光が、その透過の際に屈折分解せられて現はれたる種々の色彩たるに外ならずと申すこともできるであらうと思ひます。

そして何れの宗教的生活においても、その特異の色彩を還元して、根本の光明に歸入せしむることを得たる時、始めて眞との宗教的生命に觸るゝことを得るのでありまして、凡ての宗教は、必ず何等かの方法によりて此事を成せんことをつとめてをるのでありますが、直下端的に之を成就せんとすることを、少くとも當面の目的としてをるものが禪であると思ひます。此點より見ますれば、禪は凡ての宗教が必ず通過するをよしとする正門であると申しても差支へあるまいと存じます。但し佛教の一宗として發達してまゐりました現今の禪は、多少の佛教的色彩を帶びてをることは申すまでもありませんが、證悟の方法としては、流石に極めて鮮やかな、最も行屆いた修行の妙術眞訣であると申さねばなりますまい。これ私のあこがれをいだいてをく所以でありますが、なほ此事につきて少しく述べさせて頂きます。

二

身心一如、性相不二といひ、或は二元、或は一元、或は一體兩面などといふ說の存在いたしてをりますことは、『人』はつねに肉體(身)と精神(心)との二つの方面より觀察されつゝあるものであることをよく示してをります。しかし此の如き二面觀を許す立場より申しますれば、身と心との外、更に靈ともいふべき一面をも加ふるが當然であると思ひます。通常、心靈の二字を熟せしめて一語となし、之を單に心(精神)と同義に用ひ、身(肉體)と相對せしめて二元となすのでありますが、私は寧ろ心と靈とを別ちて、身、心、靈の三元と觀るべきであるやうに思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

所謂宗教的體驗なるものは、此の靈に於て行ふ所のものでありまして、こゝは言絶慮絶の境界、所謂『思慮、分別、卜度、觀想、知覺、慧解の外に在る』ものでありませう。併し人として此の世に現住する生活に於ては、身心を離るゝことができぬのでありまして、靈的體驗は必ず身心に影響交渉せざるを得ぬのであります。靈的体驗は同一でありましても、身と心とは經歷と環境との相異なるによりて千差萬別であります。同一の光明、種々の色彩に分れて來る所以は、即ちこゝにあると思ひます。

靈光が身心によりて屈折して、彩華絢爛たるは是れ自然法爾、まことに結構なのでありますが、身心が溷濁、擾亂いたしてをります時、靈光これが爲に汚染せられ、或は壅蔽せられて、昏迷こゝに生ずるわけでありますから、何より先きに、身心を調正せねばなりません。是れ卽ち禪の修行でありませう。如法に修行いたします時、身心自づから調正し、靈光陸離としてそこに現成し、修證不二の眞義もまたそこに體得せらるゝのでありませう。

なほ少しく、此の修行といふことにつきて考へを進めて見たいと思ひます。

三

禪の修行として重きをおかれてをりますものは、看話、默照、いろ〳〵に分れましても、要するに坐禪工夫と參師問法とでございませう。卽ち坐禪によりて、所謂心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止め、作佛をだも圖ることなく、一まづ一切の執知成識を撥無し去つて、靈的體驗の機會を作り、且つ或は提唱聽問により、或は參禪入室によりて更に理知を整理し、靈光の透過光耀に便ならしむることにあるのであると思ひます。

併しながら是れは、心的作用——を分けて假りに知情意の三といたしますれば、その——中の知的方面の整理なのであります。身心の調正といふことよりいたしますれば、更に心的作用中の情意に關

するものがありませんでは不十分なわけでありますが、禪には此方面の用意も、流石にまた頗ぶる用到深切なものがあると申さねばなりません。即ち出家捨緣と行持修養とが是れでありませう。出家して諸緣を放捨し、迷情執着を斷ちきることは、丁度知的方面に於ける坐禪工夫に當るのでありませう。そして清規に從ひ、戒律を守り、日々の行持、忽がせにすることなく、聖胎の長養に心をひそめ、以て靈的體驗の顯彰に蹉過滋滯なからしむるのは、これ即ち情意の整理でありまして、正に知的作用における參師問法に相應するものでありませう。

此の知的方面と情意の方面との調正が並び行はれます時、如法の修行がとゝのふので、是れ所謂自未得度先度他の菩提心を護持しつゝ、行を迷中に立て、證を覺前に獲得する禪の正業であると申すべきでありますまいか。

四

然しながら以上申述べました所の修行なるものは、要するに出家捨緣を先決の基礎的條件といたしてをるものゝやうであります。承陽大師は出家の功德を說かれ、是れ佛々祖々正傳の正法眼藏涅槃妙心無上菩提なりとたゝへられ、在家成佛の說を正傳に非ずとなし、且つまた『維摩いまだこれらの光明功德のみえざることは不出家のゆえなり、維摩もし出家せば、これらの功德あるべきなり。當時唐朝宗朝の禪師等これらの宗旨に達せず、みだりに維摩を擧して、作得是とおもひ、道得是といふ、これらのともがら、あはれむべし、言敎をしらず佛法にくらし、或はまたあまりさへは、維摩と釋尊とその道ひとしとおもひいへるおほし、これらまたいまだ佛法をしらず、祖道をしらず、維摩をもしらず、はからざるなり云々』とさへ申してをられます。そも〳〵『出家』といふことの禪において占むべき地位、その價値は如何に見るべきか、はたまた『出家』といふことの眞義は何處に存するのであらうか。これ等はつぶさに究盡するを要する問題でありますが、同じ大師の御言葉にも、『身の在家出家

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

にはかゝはらじ』とあり、且つ、世務必ずしも佛法をさまたげざる由をも述べてをられるやうな次第でありますので、在家の儘にして、禪を修めてをらるゝ方々、古來決して少くないのであります。これによりて更に惹起せらるゝ問題は、在家の學すべき回光返照の退歩なるものは果して出家受戒の人々のそれと同じでよいものであるか、どうかといふことであります。出家の修禪に於ても、一方その出家たることに囚はるべからざると同時に、また四依の行法に從ひ、淸規戒律を綿密に、徹底的に守るのでなければ、眞との生命に觸れ、それに活きることの覺束ない道理もあるやうでありますが、諸緣を放捨せず、持戒梵行を事とせずして修むる、在來の坐禪參問なるものは、なほよく所謂出身の活路に斷闕することとなきを得るでありませうか。

假りに坐禪の儀法は出家在家を問はぬといたしますならば、在家禪に於ては、出家の戒律梵行に應ずべき何等のものも無くてよいものでありませうか。覺前に於て得らるべき證は、眞俗その歸を一にするにいたしましても、迷中に立つべき行の形には、またおのづから異なるものがなければならぬのではないでせうか。此の俗諦成就に於ける無相の淸規が明かに立つてをりませんでは、折角の禪風擧揚も、徒らに水泡の立消えに終はることはないでありませうか。

五

以上は或る所に於て申述べましたもの、平素所懷の私見で、特に研究しての報告ではございません。全く門外漢の垣のぞき、盲者の摸象、之を博雅の一粲に供するのは、まことに恐れ多いのでありますが、定めし一知半解、杜撰を弄し、記持一兩、恣まに取捨すとの御咎めもあることゝ存じますが、此の如き見解も、之を俗諦成就を本願といたしてをる一燈園生活に思ひ寄せます時、またいろくの問題を惹起し來る機緣ともなるかと存じます。どうぞさるかたに御諒恕下さいまして、皆樣の體驗と研究とによりて、何くれ御垂敎たまはるを得ば、難有仕合はせと存じます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

南紀行脚

I　T　生

天香さんは此八月よばれて南紀地方及三重縣の一部に托鉢された。此地方は田邊町を除いては始めての土地ばかりだが、到る處大變な人氣で、豫定外のにわかの講演會でも、なほ數百の聽衆が集るといつた具合で、どんな小村でも二百は下らず、新宮のような大きな町になると千に近い聽衆があつた。同じ頃、紀州瀞峽の探勝をされたとかいふ、ある大都會の市長及び其の一行の御歴々が、歸途田邊町で講演をされたが、聽衆が僅百名位しかなかつたときいて、その相異の甚しいのに驚いたのであつた。思ふに、此市長及御一行の講演に聽衆が少かつたのは、一つは御話の題目がじみであつたからでもあらうが、天香さんの人氣の盛なのには獨特の理由があるのです。それは天香さんは實行家であるといふ評判です。一燈園生活は生存競爭を離れた生活である、奪ひ合ひをしない生活であるといふようなことにはまだ興味の中心はないらしい。天香さんの講演の巧拙なり内容なりもまだ知らない。たゞ何でも京都に一燈園といふ新しい教があつて、其處には西田天香といふすばらしい大膽な實行家がゐる。その人は珍らしい人格者で、講演を頼まれるといやとはいはぬが、先づ必ず自ら實行した上でなければ口にしない。そこで有り難い。近年紀州の地も隨分名士の來往はげしく、講演も屢々開か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

れて有難い話は可成きかされてゐる。耳が大分肥えてゐる。耳だけならもうとくに極樂往生してゐる。けれど耳だけだから何だか賴りない。壇上で節約を說く名士も、演壇を降りると贅澤ばかりするから一向隨喜出來ない。其處へ來ると天香さんは實に勇敢な實行者だ。汽車も汽船も三等だといふではないか。それぱかりか必要あり次第船員や車掌と一緒になつて汗を流す準備さへ常にできてゐるといふことだ。御話はともかく我々は一度風手にだけでも接したいといふのである。

天香さんの御一行が串本町へ着いたのは八月二日の午前二時頃であつた。丁度はしけにのりうつると、俄に大雨が降り出して皆びしよ濡れになつた。本船まで出迎へて天香さんのあの服裝に面喰つた講演會の幹部方は俄の大雨に非常に恐縮し、挨拶の言葉もなく困じはてたらしいが、その時濡れ鼠のようになつてにつこり微笑を含み乍ら佇んでゐられる天香さんの田舍爺のようにつゝましいおちついた御姿を見て幹事の方はたゞならぬ感じにうたれたそうである。萬事がその通りだから講演の世話する人達が先づ異常な感激に充たされる。それが電氣のように次から次と會場に傳はり、その人だちが奔走したり宣傳したり廣告したりするのだから、自然感激がほとばしつて村の人や町の人を動かし、澤山の熱心な聽衆が集まるのである。

そうした聽衆の前に立つて、極く卑近な實踐的な爲めになるよい御話を、理窟拔きに殆んど實際談ばかりで面白をかしくなさる。御話はじみだが座談のようにしんみりしてゐる。對話や對話のおちは講釋師も三舍を避けるかと思はれるほど手にいつたものです。そして諄々と說き出される。何しろ實生活が背景にあるから一口の言葉は生きて動いてゐるように力強い。聽衆は魅せられてしまひ二時間

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

や三時間はすぐたつてしまふ。講演が濟んでも面白かつたとか有り難かつたとかいふほかに實際的な何物かゞ殘るらしい。天香さんにとつてはどこまでも御話が主ではないといふことが、その御話の强みになるのだから妙です。

こんな風にして八月二日から十二日まで十一日間に、十五ヶ所で廿回の講演をされた。此地方は始めてのことだから多くは一燈園生活といふ演題で、他の地方ならもう五六年前に濟んだかと思はれるような御話をなされた。一燈園は奪ひ合ひをしない生活だとか、預ることをいとひはせぬが無一物でも結構なのだとか、極度に質素だとか、これには現代の贅澤文化、煩瑣文化に反對され、一燈園では日常の衣食住から敎育、病氣、結婚、葬式、其他萬般のことに至るまで御金をかけないでしかも眞實に充ちた生活をなし得ることを實例をもつて話される。立山さんのピアノの家や、新婚旅行に見立てた新夫婦連れの御遍路などが屢々引合に出される。次に何事にも自分が惡いのだとあやまること、あやまることによつて得られる心や社會の平和を幾多の例證をあげて繰り返し述べられた。

「罪あらば我をとがめよ天つ神、民は己れの生みし子なれば」といふ明治天皇の御製は、有名な幸德秋水事件のとき、陛下が陛下御自身を御責めになつてあやまられた御作だときいた信州のある先生が、自分の受持生徒があまり屢々過を繰り返すのに業を煮やして之を打擲した事が急に濟まなくなり、翌日學校へ出ると敎室の床板に兩手をつき額をすりつけて、どうか赦して吳れ、濟まなかつたとあやまつた。すると生徒達も泣き出して先生に向ひ、「どうかこらへて下さい。私だちが惡うございました以後はさつと改めますから。」と同じようにあやまつたそうな。それから級は改まつたといふ實

際話を串本教育支會の講演會でなされると、滿堂水を打つたようにしづまつて、聽講の先生方の目には涙が滲んだであらうほど森嚴な空氣がみなぎつた。御話の方はとにかくとして、信州の一小學校に起つた事實はすばらしい光景であつたらうと思ひます。

次に拜むこと。價なくして生かされてゐるから價なくして働くのだといふこと、其他一燈園の初歩のことを實例によつて詳細に說かれた。面白いものだから聽衆はやんやと喝采するが、話は笑聲の中に了つても常に何物か實際の問題を聽衆の胸に打ちつけずにはゐなかつたようである。

新宮町では六日夜志賀重昂氏と同席で講演された。大變な聽衆であの廣い公會堂に立錐の餘地ないほどの盛況であつた。志賀氏の所論の要旨は、今後の世界は石油時代を現出する。空は飛行器に征服される。陸は自働車に征服される。海もやがて發動機船に征服される。あらゆる機械はガソリンで動くようになる。だから現今世界の烈强はメソポタミアを中心にして石油戰を現じてゐるのである。日本が幾多の犧牲を拂つても樺太の油田を物にしなければならなかつたのも其の爲めである。けれどこれだけでは無論足りないので、日本は今のうちにどうかしなければ、近く世界の競爭場裡に立つて動きがとれなくなるといふのが其の一つである。次に世界の有色人種は長い間白晳人にいぢめられてゐたが最近やうやく目覺めて來た。モロッコを見よ。エヂプトを見よ。トルコを見よ。ペルシアを見よ。印度を見よ。支那を見よ。近き將來に於て有色人種の覺醒擡頭と共に、有色白色兩民族間の大衝突が惹起されるにきまつてゐる。その時日本はどうするつもりか。日本人また有色人種に相異ないから、有色人同盟の盟主にでもなつて白晳人に對抗すべきであらうか、それとも白人方か或は中立か、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

そのことは志賀先生御自身にも分らぬそうである。故に今後屢々西部アジア地方に出掛け大勢を觀察し、日本のとるべき態度について大いに研究する所あらんとして居られるそうである。

六十三歳の志賀氏は非常な元氣で、われるような聲聲を張り上げて辯じ立てられた、今後更に十七八年は研究に沒頭しても、なほやつと八十歳にしかならぬのだから、その後は隱居して日本國中を遊說し、國民に向つて大々的警鐘を亂打しようと思つてゐるなどゝ氣焰をあげてゐられたが、御氣の長い話だと思つた。

こんな威勢のいゝ講演を相並んで天香さんの御話は例によつて例の如く一燈園生活の由來や現況をしんみりと說かれたのだが、兩氏の演說とも聽衆は熱心に耳を傾けた。翌日の新聞は兩氏の講演を積極と消極の皮肉な兩極端などゝはやしたてゝゐた。或は一寸うける感じはそうかも知れぬが、究極の所へゆくとどちらがより積極だか淺はかな考で分るものではない。たゞ後に天香さんは「志賀さんの說かれたような世界の現勢に直面して如何なる決心態度をもつべきか、一燈園は常に腹がきまつてゐなければならぬ」と諭された。

十一日午後田邊中學校で敎育家のためにされた御話は今度の講演中での殊に深い感動を與へたものであつた。それは敎育家は兒童の內なる大自然の光を拜まなければならぬといふ一大警告であつた。人爲の小刀細工をもつて自然をまげてはならぬといふ大獅々吼であつた。西も東も知らぬ子供こそ純粹無垢に絕對の御光に浴してゐるのである。これに西と敎へ東と諭すのは便宜のための假定にすぎず、本來無東西といふことをよく〳〵含めて置かなければならぬ。知識の奴隸になつてはならぬ。知

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

識によつて自由を失つてはならぬ。知識で縛つて子供を神經衰弱に陷らしめるのは悲しむべき現代教育の弊だといふことを反覆力說された。また藝術についても、現代の都會文化は末梢神經の文化である。此の末梢文化の母となり子となつて存在する現代の多くの藝術はやはり末梢藝術である。現代の大藝術と呼ばれるもの丶多くは、自分の直覺する限りでは魂の不安が生み出したものだ。だから盲(めしひ)の手引する盲と同然で、人を懷疑に導き、魂の不安を增す刺戟の大いさに從つて大藝術といはれてゐるやうなものだ。若しほんとに人の心の糧となる藝術なら、それは眞正の宗敎と等しく人の心を永遠のおちつきに迄高めて吳れる筈のものであるといふことを高唱された。それについて一つのエピソードがある。それは天香さんの御次男の理一郎さんが、病重くなつた或る日病室の壁に掛けてあつたロダンの「考へる人」といふ彫刻の寫眞に見入つてゐると、段々感情が昂じて來て到々血を吐いてしまつた。隣室のお母さんが來てびつくりし、思はず南無大師遍照金剛々々々々々々々々と唱へたが、あまりせき込んだ唱へ方だからか理一郎さんは少しもおちつかない。ふと目をそらすと其處にはロダンと少し離れて慈覺大師か誰かが描かれた高野の赤不動がはつてある。何故ともなく我を忘れて見入つてゐるうちに、何ともいへないなごやかな氣持になつたらしく、すつかりおちついてしまつた。そこで天香さんはいはれる。次男に血を吐かせたのは流石にロダンである。實際ロダンには血を吐く思ひがあつたであらう。ロダンが描き或は刻む一片の筋肉のうねりにも生命の動搖不安が脈々と波打つてゐるのであらう。さうした藝術を詰らぬとはいはぬけれども、血を吐かせる藝術から見ると、吐く血をも止めるほどの藝術に一段の高さを感ずるのである。眼をむき出し、口が大きく裂けて牙を喰ひしばり眞赤なこわい顏をした赤不動は一見興奮の極度のようにも見える。けれど深く根を探れば其處には興奮の影もない。それは東方の寂滅、即ち久遠の靜けさから流れ出る一つの光である。深く魂しひに

喰ひ入り肉體にまで影響する偉大な力はロダンも赤不動も同じだけれど、一は身心の不安と焦躁にまで魂を困惑させ、他は不可思議の解脱へと魂を高める。神經衰弱の現代は此の「考へる人」に親しみを感じ、赤不動にはよそ〳〵しさを感ずるかも知れぬけれど、意識以前に働く純粋微妙な感覺にまでさかのぼると、一は血を吐かせ他は其の吐く血をも止める。其處に末梢神經の好惡以上の爭はれないものがあるではないか。一燈園はかくの如き寂かなる光と、その光の無理のない現はれである萬物の中にのみ完全な美を感ずるのである。

天香さんの御講演は十二日夜西牟婁郡岩田村のそれをもつて最後とした。紀南の托鉢はかうして無事に了へた。顧ると紀州路の旅は美しい山と海の送迎に暇なかつた。森浦から勝浦へ、勝浦から太地へ、私達は小さな巡航船に乘つて再度勝浦灣を横切つたが、兩日とも空には黒雲低くたれて四方をとり圍む連山は青暗い神秘の蔭に沈默し、灣内には浪が高かつた。私は凄い中にも或る捉へ難い懷しさを感じて涙ぐましく佇んだ。荒れ日にアルプスの連山を眺め乍ら瑞西邊の湖上を渡つたら、かうした氣持ちにもならうかと思つた。

十一日午前十時に本州の最南端潮岬沖を通過した。甲板から見降すと紺碧の黒潮は浪と浪と嚙み合ひ乍ら物凄い海潮音を殘して東へ東へと流れて行く。大平洋の怒濤はそゝり立つ岩に嚙み附いてしぶきをあげ、岬の丘の上には綠の牧場が靜かに開けて眞白い燈臺が一つ淋しく立つてゐる。此處では强い色彩の印象を受けた。すべてかうした風光に接する時、一燈園の内容の豐かさを見せられるようにも感ずる。柔しい詩ばかりが一燈園とは限らぬ、柔しい中にも力强く、素直な中にも物凄い自然の啓示といふやうなことも天香さんの常の御言葉と照し合せて痛感せられたのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

自分に聞かせる言葉

八田勝三

馴れ過ぎるといふことは恐ろしいと、此頃しみ〴〵思ふ。

『園の用事をさせて貰つてゐるのだ』など不用意に思ふともなく考へてゐると、園で食べさせて頂いてゐることや、休ませて貰つてゐる事が、何時の間にか當然とも何とも考へることもしないで、平氣で暮して居ることが少なくない。入園當時を思ひ起すと、今よりはもう少しつきつめた嚴肅な心持で歩ませて貰つてゐたやうである。主人のゐないやうな園では、自己反省以外に自らをためてくれる本當の鞭はない。道傍から一夜の宿を乞ふ巡禮の虔ましい心持を、毎日何等かの方法で呼び起さないと、隨分危ない日が此頃は可成多い。

×

梨畑の草をけづつてゐたら、鍬をふりあげる度に草の實がはらりと、黑土にこぼれ落ちる。何といふ自然の用意の周到さよ！　草の枯れて了ふ頃には、次の生命が疾くに芽生えてゐる。そこに寸分の隙もない。然かも何等の無理もない。

方一尺の天地の面白さよ！　梅の實の落ちてゐる傍らに、みゝずが屈伸してゐる。蟻が巣を覆はれて卵を運んでゆく、てんとう虫が梨の葉からとんで來て、鍬の恐ろしさも知らないで、平氣でその傍らをはふてゆく。人間との交渉をすつかり忘れて、唯獨り自然の懷に抱かれ得る時を持つ方は、人事にこだはつてゐる心持を整理してくれるようだ。

×

萩に油虫がついたので、石油乳劑をかけて下つた處、强かつたか枯れそうになつた。已を得ず枝を切つて捨てた處、何時の間にか新らしい枝が出來て、前より背が高くなつた。美くしく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

若葉は生命の根強さを讃美してゐるやうである。本當に必要なものならば、私達にだつて惠まれるに違ひない。但しこれは自然の理に任さなくちやならない。徒らなる智慧分別こそは却つて我が身を損うもの。私は今一度手近な自然を見直そう注意力が餘りに散漫になつてゐた。『眞理は眼前にある。』と理智的に肯定してゐた心持より、もう少し深い世界を漸く覗かせて貰へ出したやうに思へる。此頃を有難く思ふ。

×

Kさんの少女小説に、長屋に住まなくちやならなくなつた或る少女が、庭のない新らしい住居を悲しんで、公園へ草花の種子をまきに行つたといふやうな梗概のがあつたが、少女らしい純な氣持を嬉しく思ふ。然しそれとは全然違つた見地から私は家も持たない隨つて庭も持たない境遇を有難と思ふ。暑苦しい塀に圍まれた少つぽけな煎栽に、何で本當の生命が育まれよう。野へ出でよ！山に登れ！海岸に佇てよ！雷電を閃めかし、夕雨を降らせる自然にまさる噴水やある。宇宙大に擴がる情景は盡く其儘我が眼を喜ばせてくれる。誇張でなしにその境地をうかとひ得るやうになつたのがしみじみ有難い。

×

落葉はそこへ落ちた儘でさへ役にたつ。今日二日目の御誕生の郁子ちやんの在園は、お蒲團の縫かえに疲れ切つた八九人の女性に、新らしい力を覺える。智慧を用ひない世界に、私達が企て及ばない大事業が出來上つてゐる。四六時中生れ代えつて來たのだと思つて、赤ん坊になることだ。

×

『一切に同時に仕へんが爲には、己を得ず肉親の家から死なゝくちやならなかつたので御座います。何卒あなたの息子樣を佛樣の所へ養子にやつたのだと思つて下さい。娘樣を神樣の許へ御嫁にやつたのだと考へて下さいまし。』こんな手紙を書く度びに精進の足りなさを恥ぢる。

—— 大正一四・七・一九 ——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

私の信仰

齋京守道

昔、安居の雛僧、或る時師僧に問答して、曰く「如何なるか、是れ佛」と、師僧答へて曰く「板の間をよく拭け」と。

或る旅僧あり、一山寺を尋ね、主僧に問ひを發して曰く「佛教の大意、是れ如何」と、主僧答へて曰く「貴僧、都下の米薪の價を知れりや」と、旅僧一言を返し得ず、拜辭して去る。

京都東山、歌の中山に清閑寺といふ精舍あり、昔此寺の大檀越に、大黑屋傳兵衞といふ大篤信者ありて、代々商を營みて家榮ゆ、一日算盤を彈きて大福帳を計算す、時偶々、清閑寺僧訪づれて曰く「主公何をか爲す」と、傳兵衞即座に答ふるやう、「大般若經を轉讀しつゝあり」と、僧重ねて問ふに「主公の般若轉讀は如何なる功德ありや」と、傳兵衞更に答へて「此の大般若轉讀の功德は實に廣大無邊なり、正直に轉讀（計算の意）せば、世人の信用を博し商賣發展し、家運益々繁昌すれど、若し一朝誤まらば（不正計算の意）天罰、立ち處に顯れ、獄吏來りて後手に捕へ、獄舍に牽いて此世の地獄に惱み、子々孫々に汚名を殘すに到る、心すべきは此の般若の轉讀なり」と。古歌に曰く

行も禪、座もまた禪と、知るからは、
寢おきも、禪のすがた、なるらめ

と在る如く、彼の雛僧が誠實に板の間を拭き、山僧が旅僧の問答に耽るを戒め、人生最大事の米薪の價を説き、町人傳兵衞が正直に出納簿を計算し、商道を守る如く、士農工商己々其天職を守り、行住座臥、恒に正しき道誠の心を保持せば、是れ即ち禪であり、行であり、自行化他の菩薩行であり、萬德圓滿の佛行で、濟世利民の鎭護國家で在るのだ。

私は信仰とは、天地宇宙間の絶對無限の大眞理を人間生活の日常問題に適用することであると思ふ。又佛教の意義、廣大なりと雖も、宇宙

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

と人生との關係を說きたるもので、宇宙の大慈悲に對し、絕對に報恩感謝することで、究極すれば、慈悲報恩の四字に歸すと思ふ。

故に禪も行も、念佛も題目も、羅漢講式も、懺法會も、般若轉讀も、大施餓鬼會も、皆々、如何にして宇宙の大慈悲を確信すべきか、と、如何にして報恩感謝の行を保持すべきか、の、二項を解決するに過ぎない、必竟、心の問題を研究するのみだ、故に心の一點正誠ならば、取りも直さず夫れが佛敎であり、大哲理であるのだ、されば行住座臥、慈悲報恩の二念を以て、世業に就事せば、夫れが卽ち、禪であり、行であり、念佛であり、題目であるのだ。

昔、鎌倉執權北條泰時は、明惠上人に治國の要を聞きしに「慈」を以てせよと誡へられた、爾來北條時代は慈と儉とを以つて、治國の要とした。又、德川家康は天海大僧正に平天下を聽きしに「忍」を以てせよと、敎へられた。家康が「人の一生は、重荷を負うて遠き路を行くが如し、急ぐべからず」と、戒めたのも是れが賜物であるのだ。

如上、北條氏の慈、德川氏の忍、又、彼の源義家が八幡大菩薩、上杉謙信が毘沙門天、加藤淸正が南無妙法蓮華經の旆を飜して、戰陣に臨める等、正に就き邪を戒め、慈悲報恩の二念に、鎭護國家の一念在るのみだ。

是れ故に、軍人が銃劍を帶びて戰場に向ふも、農夫が鋤鍬を執りて田園に入るも、大工左官がハッピを着て作事場に働くも、商人が算盤を彈きて出納を精算するも、皆等しく正に就き邪を戒め、慈悲報恩の二念を以てせば、是れ卽ち大乘佛敎の眞髓、濟世利民、鎭護國家の一念に徹底するものだ。先帝陛下の御製にも在る如く

國を思ふ途に二つはなかりけり
　軾をとる身も、鍬をとる身も

と。

私は本年一月、京都に天香先生を尋ね、爾來、一燈園の生活に觸れ、現今東京市結核療養所に、奉仕して居る。元より不敏、一燈園生活

の意義を解し得ず、天香先生始め、同人先輩の福田を荒しつゝ在るものと、恐懼して居るが、唯た此の、お光のお慈悲に對し、聊か報恩感謝し、世上のお役に立たして貰はんことを期して居る。何日ぞや、天香先生に、園生活の意義を尋ねた時、先生は「一燈園生活は世の中の、お仕事をさして貰うて、己が心中にホク〱、喜びを湛へるのみだ」と、私は此の一言に、ハタと膝を拍つた。爾來此の意義の下に、懸命に送り、療養所のガラスを拭く、中庭を掃く、折々は患者の方に慰安を與へる等、日々「希望に起きて、感謝に寢つて（萬朝報懸賞募集句）」居る。

私は在郷の頃、觀音を信仰し、聖德太子を崇拜し、聊か宣傳に勤めて居たが、何となく慊らざるものが在つたが、計らず此の生活に觸れ、口の宣傳法のみならず身、の宣傳法を得、快哉を叫んだ。經文に、身口意の三讀といふことが、在るさうだが、私は一燈園生活なるものが、身の讀誦、身の念佛、身の說法であると、解して居る。穢い便所掃除などを、さして貰ふた時、先の方は何と思つて居らるゝか、私は唯々、念彼觀音力を以て、常樂我淨（十句觀音經）〱と、朝暮にお光に感謝して居る。

近時、宗教界の革新運動は、大分目覺めて來たやうで慶すべきことである。越後の僧大道長安師の佛教形式打破、大內青巒居士の佛教通俗化、村上專精師の佛教統一論、高田道見師の釋迦一佛說、曰く日蓮主義、曰く親鸞研究、曰く觀音信仰、と倂し皆口の宣傳のみである。斯る口の行のみ多き時運に、獨り天香先生の默禱實行の身の行は確かに一新機軸で在ると思ふ。私は此の一燈園の托鉢主義なるものが、個人的交涉なるのみならず、更に進んで社會的意義の下に活躍せんことを祈願して止まざる次第である。

（大正一四仲秋、東京市療養所にて）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

如是生活

乞士天涯

みんなをのせて運ばうよ

おゝ一杯の火の世界だ
都會も村落も
友よ
わたし達は車となつて
みんなを載せて走らうよ

おゝ一杯の洪水だ
野も山も
友よ
わたし達は船となつて
みなをのせて運ばうよ

「船頭さん
河を渡しておくれ」
夕ぐれの河邊の森で
わたしを呼ぶ聲がする
旅人だ

（大正十四、七月）

惡魔

餓、夜、野宿
雨、雪、嵐
寒さ――
私はまだその怖れから解脱出來てゐない

疲勞、衰弱、苦痛
死、恐怖――
惡魔が私におそひかゝる
腹に力を入れて坐はらうと思ふが
その元氣さへ出なくなる

お光りよ私を護つて下さいと祈れば
祈りの蔭からそつと覗き込んでゐる
惡魔のずる相な顔が見える

（大正十四、五月）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

如是生活（一）

一心無心到處是路頭
一心有心路頭不路頭

本來路頭なく屋裡なし
路頭に執して路頭を亡ひ
屋裡の安逸に道を失ふ
あゝ危いかな光の子等よ

縁あれば入つて托鉢し
縁なければ去つて經行せよ

此の托鉢の生活は
取でもなければ與でもない
我人衆生の相を絶し
無所得の故に一切の法を立つ

悟に非ず迷に非ず如是心身
如是生活本來究竟

（大正十四、七月）

如是生活（二）

この眞心これ法身佛
この淨身これ報身佛
この正生活これ千百億化身佛

路頭にあらず
屋裡にあらず
行脚にあらず
旅にもあらず

法如さ赴くさころ皆是光土
光祖密に付す如是生活
炳らかなり日月山河を照らす

（大正十四、七月）

◇**本號表紙題字**　道元禪師の御自筆の普勸坐禪儀の中からいたゞきました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

高尾山の歌（三）

磯山松男

擬古一首

こゝにして東京やいづこに海を拔く千六百尺のむさし高尾嶺

（十合目は海拔千六百尺）

山櫻

青葉道明るさ見れや陽に透きて八重山ざくら咲きさかりゐる

おのづからくづるゝ花や久方の陽光に映えて舞ひ落ちにけり

おのづからくづれたまりて芝草の青きが上に白きはなびら

山を下りる急な坂道の中途に片握り程の檜の木が立つてゐた。勢づいた足をとめるために、誰でもがこの木に掴まるのであつた。木は小さいけれども人々に奉仕する日々の勞苦は大きい。

良寛様ならば立派な長歌を詠んでこんな反歌をつけるだらう。

皆人を支へたすけてふさりえぬ坂の中程の一本檜あはれ

山坂の一本檜あはれ危しと皆人の手に握り伏されつ

皆人の手のふるゝところつるつると光りてあはれ坂の一本檜

十三國大見晴

こゝにして十三國を見晴らすと山のいたゞきに手をあげて立つ

夏さるや並みよろふ山のもやがくりはるけきはたゞ指にさよかも（帝室林野局林業試驗場が阿屋の卓に各方面の山や國名を記してゐる）

指してそれとは見えれ常陸なる筑波の山はこほしきろかも

（望鄕）

植え並めて株條とほる檜の丈いち樣にのびて山をおほへり

殖林の下草青きところどころ臥牛かと思ふ燒株のいろ

篶は深き谷間になくならし脚下を見れば青杉の矛

千社詣

杖の中にしこめる竹をつぎのばし千社詣札は屋根の裏に貼る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

糊と札と肩にふりわけかけにけり紺の脚絆に草鞋はいてゐる

山　吹

深谷にしだれかゝりて山吹の一重の花はいまさかりなり

丈にあまる一重山吹枝だりつつ山腹ひろく咲きにけるかも

山吹の黄花こぼるゝ深谷のつめたき水に蛙なくらむ

綠の谷

谷川をわたす土橋の落ちくづれくづれし上に杉の葉たまれり

杉落葉の下を流れて谷川の水滞らけし音を立つるも

深谷を埋む若葉に射す光洩れ〳〵て土にはだらなるかも

若葉影ふかくたゝへし谷川にのぞむわが顔の青みたる見ゆ

谷川に沿ひ下る道のくづれたり飛び〳〵の岩ふみてこゆるも

飛びこゆる岩塊のうごき谷水のにごるもすれやたゞにすみつつ

紅(くれない)の虎杖(いたどり)の莖太立てりはまくわれはつみにけるかも

いたどりの皮をむき〳〵うれしさや童となりてわれは食みけり

いたどりは酸しと谷水手にくみてこゝだくのむにうれしかりけり

園を離れ行く人々

お光のみ胸は宏量無限でありますけれども、又一面嚴肅にして犯すべからざるものがなければなりません。左に列記するやうな人々は一時は許されましても、聽ては園を離れて行かれるらしい。

お光を畏れぬ人、朝夕の勤行を怠る人、感謝の念が薄い人お光に慾(もと)める人、師のお話を熱心に聽かぬ人、人様や親兄妹知己友人の方を敬稱せぬ人、多言な人、理智に奔(はし)る人、專門智識に囚はれてゐる人、書物を耽讀する人(餘暇を善用する意味でなく日々托鉢先へ書物を持參して行く人を含む)、煩悶懊惱の根を絶ち居ない人、責任感に乏しい人、自由托鉢を好む人、路頭へ(形だけの)出たがる人、癖(くせ)のされぬ人(多様なものを含んでゐますから熟考味得して下さい)、禪堂で寢(やす)まぬ人(男)、賁、酒を好む人、髮を伸ばす人(男)、下駄を穢して居る人、無精な人、物を粗末にする人、女性的な男子の方、男性的な女子の方、自由に近い結婚をする人、所謂宣光社を慾望する人、日々の托鉢から特別歸園の遲くなる人、(左の三項は割合多し事實を視て)肉體的に特殊な欠陷のある人、二十歳前の人(男の方に多し)、入園を許されゐる一家族の中で一人でも落付かない人のある時。(S生投)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

鹿ケ谷たより

無庵

七月一日　「自分達もせめて月に一二回位朝の間暫らくだけでも何處かで托鉢させて頂くことが出來たらと思ふが、それには宥される事なら一燈園の人達と共にお願いしたい」との京都光の友のある方達の發願で毎月一日十五日の兩日朝五時頃から七時頃迄丸山公園で托鉢させて頂く事になつて今日で二回目。生憎の雨の爲め暫らくで切上げて、天香さんから二十二三年來緣深き此邊の事なぞ、智恩院の山門に雨を避けて一時間餘りうかゞつた後、皆樣はそこから托鉢先にそれ〴〵お分れ下さる。ふと思つた事は光の友會の方が一人もお見えになつてゐない事。午後から朔日會で座談の事、光の鄕の事など話題に上り、天香さんからもそれらの事について いろ〳〵とお話し下さる。

七月三日　園とも關係の深かつた故ゴルドン夫人の葬式が東寺で營まれ、園から八田さんが御會葬下さる。草場さん御夫婦路頭にお立ちになるとか。路頭は日々相見報恩底の事とは云へ、物淋しき思ひ禁じがたいものがないでもなし。

七月四日　前からの願ひであつた『一燈園だより』皆樣のお祈と、八田さんのお産婆役とで、うぶ聲をあげた。折角の芽生え皆で土を耕しつゝ素直に育み度く思ふ。

七月六日　夜天香さん御來園、六万行願の事などお願し下さる、天香さんがお勤めの導師をして下さる時はかたくなる勢でもないでせうが如何かすると少し調子の合わない事がある。力むことのみにくさ、とは其夜窓際で誰かの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

話。

七月八日　長々御苦勞下つた三上さんは、天香さんのお供をして山陽方面にお立ち、廣島で師とお分れになつて郷里福岡に病床の母樣の許へ托鉢に行つて下さる。

七月十六日　園のお布團の洗濯を六七人の女の方にお願ひして始めて頂く、親見さんの奧さんも早くからお手傳ひにお出で下さる。百枚近くからのお布團に並はずれたシキフとで、一通りのお骨折でない事が門外の者にまでさこそと思はれる。でも二日目にはその大部分は出來上る。今晩の夢は皆美しいでせうね、とどなたかの口から洩れる。

七月十八日　めつきり暑くなつて御病氣で休んでゐて下さる方達の御苦勞さが思はれる。山崎壽さんが點呼をかねて殘る事柄の整理の爲め御歸鄉なさる途すがら一寸お歸園下さつたのを幸ひに風呂釜の取附をお賴みする、おかげさまで每晩園で行水が頂ける。

七月廿三日　昨年の十一月以來九ケ月の間病氣で休んでゐて下さつた石原さん、四五日來急に病勢が變つて、午後三時頃天香さんが耳元で『長々御苦勞でした』『靜かに一足先に行つて待つてゐて下さい』と申されると、かすかに通じたらしく何か言はうとして動かす口唇の中にも安心さがうかゞはれて、七時五分に靜かに逝つて下さつた。石原さんは十一年九月に入園されて以來最後迄道の人托鉢者として苦しい病床にも素直に托鉢して下さつた。今日はまた三年前に園で逝かれた田中太市さんの祥日命日、故人の事なども思ひ出される。

七月二十四日　故人の兄弟中で一番此の道を理解してゐて下さる弟の勝士さんが朝六時頃鄉里信洲の下伊那からお見えになる。兄さんは昨

日七時頃靜かに逝かれました。と申上て無言の弟樣の心中をお察し申上げる。

七月廿五日　遺骸を大學から西大谷の火葬場に送つて荼毘に附し遺骨は鄕里と園と二ケ所に納骨させて頂く。

七月二十七日　昨年十月以來神戸でお祈り下さつてゐた嵯峨さん珍らしい御病氣で（全身に紫色の腫物の出來る）神戸で大體御治療されて御歸園、大學の皮膚科に乞はれるまゝに入院の托鉢。

七月廿八日　故石原さんの初七日で塾からも天香さん始め皆樣御歸國下さる。七十人返くの虔しやかな集ひ。

源信僧都四十一箇條起請

應レ重二禁制一條々

一設雖レ有二不レ叶レ心事一思忍不レ起二瞋恚一

一設雖レ遇二良緣一堅忍全不レ可二女犯一

一無慚不信徒不レ可レ受二信施一

一不レ可三好云二他人好惡一

一以二不レ堪身一敢不レ可レ好レ物

一聖教御前不レ可レ致二無禮一

一可三念思禁二妄語一

一奉二讀經一間以二遲口一不レ可二急讀一

一不レ論二親疎一不レ可レ恨レ人

一丁寧忍俗敢不レ可二追從一

一不レ可レ成二洛陽常棲之思一

一不レ可レ好二見物一

一雖レ有二治病一不レ可レ食二魚類一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一 與惡友不可好友
一 唯爲名利雖學聖教、必廻向無上菩提
一 雖有少小損不可疑於人
一 向堂塔不可行不淨
一 人常可有芳心
一 人群集處無指事不可推參
一 人物借早可返之
一 下人無禮不可見入聞入
一 不慮外雖造罪隨作即可懺悔
一 貧賤強不可好美服
一 雖惡徒者、不可打縛之
一 不可信讒言並中言
一 不可借用他人物親間雖借用早
速可返之
一 坐可斷多言戲咲
一 與人坐不可成口論
一 朝讀經暮念誦不可闕怠

一 以不肖才智不可好問答論議
一 知識者可結緣
一 乍立不可小便
一 雖粗食不嫌可食
一 行住坐臥可成滅罪之思
一 晝夜常所憶善惡事於善彌增長
於惡堅固悔之
一 乞食來時、無厭可行施
一 念誦讀經之間不可闕威儀
一 亥子寅此三時可寢、自餘不可眠
一 於萬事不可覆藏之
一 不可殺蚤虱況生類哉
一 見聞諸功德不可生誹謗
以上四十一箇條可如眼精矣

（拾芥抄より）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

未明の先驅者（一）

水上鐵治郎

松下さんから「光」の寄稿を依頼されてから數ケ月經ました。私は自分の怠り勝ちなのを慚愧に耐へません。實は詩の創作をのせていたゞくつもりだつたものですから、こんな始末になりました。私は遲筆な上に詩の創作は意外に贅澤（私の今の身分から云つて）な勞働なので、心苦しい爲め、今日まで御依頼に應じかねたのです。今後出來るだけこの飜譯を繼續して載せていたゞくつもりで居ります。原文は、イギリス勞働黨の機關紙『デーリー・ヘラルド』掲載のもので、寄書家の本名はわかりませんが、自由黨系統の人らしいのです。それは、『勞働運動の先驅者』といふ題で書いて居りますが、時にはクロンウエルのやうな專制家をまでその一人に數へて居るからです。しかし要領を得た書方で一人々々の傳記を通じて時代の背景まで簡潔につかめる點が面白いと思つて、飜譯を思ひ立ちました。

一、ルイ・ブラン

歷史上の大變革が實に思ひもよらない人々を中心にして行はれることが屢々ある、ルイ・ブランはフランスのルイ・フィリップ王當時パリで記者をして居つた短軀肥大な何の屈托もなささうな人物にすぎなかつた。生來話しずきではあつたが、然し當時の彼は思想上から云つても、行動の上から見ても大して特異の人間ではなかつた。

唯彼の異つて居た點は、文筆の立つのと、觀察の鋭い點であつた、フランス產業界の將來に於ける發展を達觀し、當時より空想的な革命論者として資本主義のいかなるものかを理解せしめた、點に於ては、彼は共和主義全盛當時に於ける第一人者と云へるであらう。この見地に立脚して居つた彼は、實に、進んで、國有と民主的經營とを基礎にした純然たる勞働者本位の企業を立案し、以て私有資本制度廢止を計畫した

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

のであつた。

然るに一八四八年に突發した第二回フランス革命は國王ルイを追放すると同時に、今までは一介無名の一記者たりしブランをして政府の一員として得意の絶頂に立たしめるに至つたのである。

當時のフランスに於ては、他の歐洲各國に於けると等しく、革命運動と云つても種々様々の分子を雜然として抱擁して居つた。中流階級も、勞働者も、自由主義論者も、社會主義者も等しく革命運動に參加して居つた。彼等の共同目的は、單に封建的王侯貴族の廢滅といふ一事であつた。從つて苟しくもこの最終目的を承認するものならば、有産階級代表者たる大銀行家と雖も、パリ街頭に於て無産勞働者と相擁して接吻をするに躊躇せず、勞働者側でも歡んで之に應じて怪しまなかつたのであつた。資本家は勞働者と手を組み合つて、『マルセイユ』を誦しつゝ、當時再び流行した『自由の樹』を圍んで舞踏をした。一八四八年二月こそ勞資間に和氣靄々たる空氣の漲つた一ヶ月であつた。

ルイ・ブランがルユクサンブール宮殿に勞働者大會を召集したのは、實にこの時であつた。この今日の勞農委員會の先驅者にも似た大會席上に於て、彼は參集して全國勞働者代表に對して彼が諒々として説明を進めたことこそ、實にいかにして平和裡に資本家制度を撤廢すべきかの問題であつた。彼の提案は滿場一致で可決するところとなつた。

之を見た資本側の態度は忽ちにして一變して仕舞つた。昨日までの歡喜と愉悦とは一時に去つて、雜然騷然として洶湧奔騰しつゝあつた大衆の革命熱は、ブランの投じた意外の提案に接して、冷水三斗を頭上に浴びせられた如く靜まりかへつた。今までは唯夢中になつて新時代の實現を悦び醉つて居つた人々は、漸次に正氣を取り直して、遂に天下二分の勢を形成するに至つた。昨日まで手をとり合つて革命の成功をよろこんだ資本家と勞働者は、今日は不倶戴天の仇敵として對峙することになつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ブランの一呼は全歐洲に亘つて反響した。ドイツの革命議會はそれが爲めに分裂を惹起して崩壞するに至つた。ハンガリア革命運動の急先鋒たりしコスートは愕然として爲すところを知らなかつた。オーストリア軍と交戰中であつたウエネチアにも內訌を生ずるに至つた。當のパリに於ては、對立の形勢は日々に切迫して、同年六月には市街戰によつて砲烟の間に相見ゆる狀態にあつた。猛烈なる戰鬪一週間の後、勞働者の敗北に歸し、ブランは茫然として自己の意見が斯の如き流血の慘事を惹起したるを悔ゆるのみであつた。

斯くてブランは海外に亡命するより途はなかつた。成程勞働者側は大敗した。しかしながら彼等が鐵火の巷から各々その陋屋に歸還した時、一脈の光明は洋々たる多望なる前途の空を展開してくれるのを看取せざるを得なかつた。彼等は大悟一番、その眞の仇敵が金銀羅綾の王座にあらずしてその背後にあるものなることを知つたのであつた。

不幸にしてルイ・ブランはこの大悟に徹することを得なかつた。譬へば彼は不可思議の力を有つ呪文を無意識に口走つた人の如くであつた。語る人は何氣なかつたが、それが一度聲に發せられたとき、忽ちにしてそれは轟然たる大音響となつて天地にとゞろき渡るに至り、茫然自失、制する術を知らざるやうになつたのであつた。彼の計畫した案が、何故に斯く全歐洲の革命運動を分裂して收拾すべからざるに至つたか。彼の案の根本の正しきを疑ひ得ざりし彼は、徒らに彼の失敗の原因を枝葉の末節の不備に歸するより外知らなかつた。晩年の彼は、一意專心この失敗の原因を說明辯護することに徒らにこの生得の饒舌を發揮するのみであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

クリスト教社會主義史（七）

松下吉衞

勞働者敎育の方へ かくて同志中最も資力あるニールのアトラス工場初め、同志が直接間接關與したゐた協同生産組合の倒産するものが續出したので、設立者等の間にも協同組合運動について種々の異見が行はれ、ラッドロー、モウリス、キングスレー、マンスフィールドの如きは、彼等の企圖を實現するに時期尙早であり、此際勞働者敎育の方向にその運動を轉換すべきであるとなした。

時恰もウエリントン公死去（一八五二年）の後をうけて、英國の對外關係は非常な緊張を示し、何日戰爭の勃發を見るや測りがたいのに、內政紊亂して難局に處する用意を欠き、國情騷然として、たゞ軍事と外交とのみ論議の題目とせられ、また社會改革を言ふものがないといふ狀態であつた。かてゝ加へて、同志の首領モウリスは奸計にかゝつて從來關係し來つたキング大學から追はれることになつたので（一八五三年十月）、理非おのづから明かであることが知られたが、彼れの廉恥心は自らの不德を責めて、協同組合運動より公けには手を引くにいたつた。彼れは、一八五三年八月マンチエスターに開かれた協同組合運動第二回年會の祝賀會を司會したのを最後に、以後キャスル街の協同組合館を會場として講演會講習會を開催し勞働者の敎育に沒頭した。これ彼れが晩年の精力を傾けつくすにい

たつた勞働者大學の前身をなすものである。

そも〳〵、同志の教育事業は、一八五二年十二月に催うされた講演會を以てその最初の試みとする。この時の科目は、勞働者の要求を探知しようとする考から、可なり廣汎に亘つて按配され、モウリスはシエークスピーアの史劇を、クーパーはバーンズを、ペンローズは建築學を、ゴデリッチは昆虫學を、ヂヨンソンは地理學を、ハンザードは天文學を、ハラーは聲樂を擔當した。これは相當の成績を擧げ得たと見えて、翌年またキングスレー、グローヴ、ロイド・ジヨーンズ等の新講師を加へて再開された。

この種の通俗講演會の外に、もつと内容の調つた講習會の試みもあつた。科目は、文法をヒユーズとヴアンシツタートとが、英國史をニール及びエー・エッチ・ルイスの助けを得てモウリスが、フランス語をラッドローが、簿記をニウリングが、唱歌をハラーがそれ〴〵受持ち、この外、圖書と經濟學とも講ぜられる筈であつたが、こゝに特記すべきは、毎週日曜、協同組合會館に開かれたモウリスの聖書講讀會であつた。聽講は協同組合員外にも公開され、婦人の入會も許された。

かうして、同志の教育事業は協同組合運動と相並んで進められていつたのであるが、一八五三年末にいたり、四圍の情況は幹部を驅つて遂にその主力を勞働者大學の建設に注ぐべく決意せしめた。

一八五三年十二月二十七日ロンドンの勞働者九百六十七名の署名した感謝狀をモウリスにおくる彰德式が擧げられ、勞働者は交々起つて讃辭や希望を述べたが、勞働教育運動への轉向の精神的基礎は、實に此日の夕に確立されたのである。校舍にはレッド・ライアン・スクエーアの婦人裁縫職協同組合が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

閉店したのでその建物をこれに充て、課程その他はシェフィールドの民衆大學に範をとることにした。

この民衆大學といふのは、一八四二年組合教會の一牧師バーレーの創設にかゝり、一八四八年勞働者自身の手によつて復興されたものであるが、ニールからの照會狀に對し早速回答してくれたので、新年早々(一八五四年一月十一日)の設立者會にその內容を報告することが出來た。ひきつゞきこの席上で「勞働敎育機關設立の計畫はこれを敎育及出版部委員會に委任すべし」とのヒューズの動議が可決され、モウリスは乞はれてその衝にあたることになつた。

彼れは直ちに仕事に着手した。計畫者は一旦委員會に附議された後、二月七日には設立者會に提出される運びになつた。多少の修正をうけて、この成案は設立者會を通過した。一般社會のこの企圖に對する感興を喚起し、叫ぶべくんば經濟的援助なり勞力的奉仕なりを得んがために、モウリスは同年六月七月にわたつて公開講演をなした。

その結果は極めて良好であつた。寄附金も八十七ポンドほど集まつた。同志達は大いに激勵を感じて、周到な用意をもつて課程を編成し、職員會議の開催を經て、十月三十日セント・マーティン會館に於いて開校式を擧行した。そしていよ〳〵第一學期の開始を見たのは十一月二日であり、百七十六名の入學者があつたが、これをほゞ同數づゝの職工及店員の二組にわけて授業した。

モウリスの講義は一週三回であつた、日曜にはヨハネ傳を、火曜には「英文學に現はれた政治問題」について、金曜には「シェークスピーア劇に扱はれたジョン王の治世」について講じた。ラッドローは特に協同組合員のために「組合法」を、ファーニヴァルは「英文法」を靴工の一團に敎授した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ワルシは「公共衞生」を、ホーズは「幾何學」を、ジオン・ウエストレーキとリチアード・バックレー・リッチフイールドとは算術と代數とを、ブルーアーは「歷史的英國地理」を、それ〴〵擔當した。尙ラスキンは同志といふわけではなかつたが、フアーニヴアルからの勸めによつて圖書科を受持つことを承諾した。(因に彼れは一八六〇年までこゝで敎鞭をとつたのであるが、この間に勞働者と親しく接する機會を得た爲めに、彼れの人生觀は根本的變化にあつたといはれてゐる)。

次ぎの學期には、生徒の數も增せば、新たに五六の講師も加はり、フランス語、ラテイン語、ドイツ語、ギリシヤ語の時間が新設された。授業時間は生徒の便宜を思ひ、夜間を選んで八時より九時、九時より十時の二時限とした。慰安淸遊のことも等閑に附せられなかつた、ヒユーズの課外集會、フアーニヴアルの日曜遊步の催しは中でも最も悅ばれた。

こゝに尙一言すべきは、設立者達の意圖が、單なる技術敎育になく、生徒をして不熟練工より熟練工に職工より書記に進ましめようとするよりは、協同生活の精神を涵養し、人間として市民としてクリスト信者として慚ぢない敎養、すなはちリベラル・エデユケーションの意味するすべてを體得せしめんとするにあつたことである。

この敎育趣旨に贊同して大學卒業生その他知識階級者有產階級者の來り投ずるものが一再に止まらなかつた。その中にリツチフイールド、ラスキン、ロゼツテイ等の名を數へることが出來る。彼等のある者はその生涯を通じてこの事業に奉仕したが、多くは種々の事情に妨げられて一二年でよした。幸ひに新しい奉仕者が斷えなかつたので事業は滯りなく進展していつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

かくてこの勞働者大學は二重の意味で成功であつた、即ち直接には、勞働者をして從來有產階級者のみの特權とされてゐた敎養に親しましめ、間接には、有產階級者をして勞働者の生活に觸れる機會を提供し社會連帶の責任感に目ざめしめたことである。

顧みれば、クリスト敎社會主義者の運動はリットル・オーモンド・ヤードに於ける一夜學校にその端を發したのであつたが、その終局は不思議にも勞働者大學にあつた。一八五四年以後その協同組合運動への寄與は見ることが出來なかつたけれど、同志達の敎育事業は、少くともモウリスの死に至るまでは能く續けられた。すなはち、彼等の事業は敎育に始まり敎育に終つたといへよう。それだけに、それは社會運動としてはてやかではなかつた。しかしながら、その社會科學の學說に對する理解と共に人性乃至人生生活についての洞察と體驗とを以てした運動の態度は、英國社會運動史上に於ける彼等の地位を獨自的ならしめてゐる。(完)

附記　本稿はシー・イー・ラーヴエンの著作に負ふところ最も多し。特記して深謝の意を表す。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

宮崎氏より訂正申込

冠省毎號「光」恭受。さて九月號にのせられた貴稿聖フランチエスコと現代生活の中に小生の談話を引用されてありますが、ちよつと誤つてあなたが聞かれた事をその儘のせられたので、茲に訂正を申込みます。十月號「光」にのせて下さい、どうぞ──

聖者の評傳をかいたからとて作者の生活が聖者その儘と思ふ事はヨツポド頭の鈍い人かさもなくば目出度い方であります。キリストや佛陀傳をかけば、かいた人の生活がその儘佛陀やキリストに肖てをるとかと思ふをろかさと同一です。然しながら(大正八年ごろ)當時フランシスをかいた私の生活なり信仰なりがフランシスに共鳴してゐた事實はホントで且その當時自分は一處不住の路頭にあつたのです。只今では家庭を有ち子供の二人まである自分です。獨身時代の信仰なり思想なりと幾分變遷してゐる事は當然であります。さりながらフランシスに對する尊敬の念は今も變りません、否益々鮮明の度を加へて來ます。今日の私は古人の跡を歩む私ではなく古人の生きられた世界に生きようとして努力してゐる境涯であります。以前には模倣の世界でした、が今日は私自らに開顯せられた大道を歩んで居ます、形式は變つても本質的には聖者の歩まれ世界も私の歩んでる世界も變りはないのです。

それから十八ページの最終の

「M氏の言の如く果して家庭をなし在家の姿では道と生活とは一つにならぬものであらうか?」

此の「M氏の言の如く::::」ドンな事を私は言つたか時日がたつてるので確つとおぼえてはいませぬが、在家の姿では道と生活とは一つにならぬとお話した事は毛頭ありません。是はあなたの推察であつて自分は非常に迷惑をおぼえます。

聖ランシスの行つたそのまゝの生活を私に出來ない事は餘りに自明であつて今更云々する必要はないがフランシスの行つたそのまゝの生活が出來ないからといつて何も自分の現在の家庭生活が道と一つにならぬと──お話した事は毛頭ありません。是はあなたのおきき違ひ亦は推察でせうから過まりの點は明白にしてをいて下さい。さうでないと私は甚だ迷惑します。此點は編輯者の特に氣をつける事だと思ひます。さうでないと尊いお光の雜誌がツマラヌ巷間の新聞記事に出て來る三面記事の如くになります。訪問記事は今後もある事ゆゑ貴下の御注意を煩はす次第であります。

追伸

現在小生の生活は決して道と別々な生活は致して居りませぬと確く信じていますから念のため申添えて置きます。ウソと思召すならば『來りて見よ』とハッキリ申あげる次第で御座ります。

千九百廿五年五月十五日

宮崎安右衞門

松下吉衞尊兄

○松下生附記　私の文か心ならずも御迷惑をおかけしたさうで幾重にもおわびします。私の不完全な眼が「來りて見よ」といはれる大事實を寫し得なかつたことを遺憾に存じます。

編輯人から

本誌わ一燈園の同人光友の機關誌たると共に、一燈園生活そのものに對する自由眞摯な評壇たる使命を擔いたいと思います。しかよりこれ論を好むがためにあらず、吾等が本願の成就を祈ればのこと。されば、掲載記事に對する異見わ諸兄姉より腹藏なく發表していたゞき、吾等の生活を、この方面からも鍊りに鍊つて、獨斷論に禍されることのない生命力の漲つたもの、最も嚴正な意味の批判に堪えるものに磨き上げ、人類愛の生活化と社會的正義の確保と兼ねて文化諸相の調整とに聊か貢獻したいと願つています。(松下生)

定價　一ケ月分　金二十錢
一ケ年分　金二圓四十錢　(郵稅共)

大正十四年十月八日印刷納本
大正十四年十月十五日發行　(第四十六輯)

發行兼印刷人　京都市烏丸頭下總町五　回光社内　西田保太郎

編輯人　東京市本所區林町二ノ七八　松下吉衞

發行所　京都市烏丸頭下總町五番地　回光社
振替　大阪五九八三九　東京五七六七一

光の友パンフレット

No.1	入牢の心を	（西田天香著）	12錢
No.2	時代苦を苦しむ	（松下吉衞著）	20錢
No.3	復興改建の精神的基礎	（中桐確太郎 小此木濵池 著）	20錢
No.4	一燈園の家風	（西田天香著）	十月刊行
No.5	一燈園生活問答	（松下吉衞著）	十月刊行
No.6	社會問題と宗教	（中桐確太郎著）	十一月刊行
No.7	クリスト教社會主義史	（松下吉衞著）	十一月刊行

發行所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪 59839 東京 57671

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN